

ONE LOVE 通信 57号

2016年4月24日発行

アビリンピック特集です。4年に一度の祭典。今回は予算が乏しく、カテラと私、義肢装具士カテラの3人のみの参加となりました。開催地はフランスのポルドー。アビリンピックはこれで3回目です。

ルワンダの外に出るといつも思います。ルワンダの障害者はあらゆる可能性を持っている。でも外の世界を知る機会がとても少ない。外に出て初めて気がつくことも多い人生。それらのチャンスを作ることもワンラブの仕事だと思います。

さて今回のアビリンピックはどんなふう過ぎていったのでしょうか？読んでみてね～。



【行って来たぜ、アビリンピックへ！】

3月24日から26日まで、フランスのポルドーで障害者の技能を競い合う4年に一度の祭典、アビリンピックが行われました。身体能力を競い合うパラリンピックはもちろんですが、収入を稼ぐ手段ともなる技能を競い合うアビリンピックは、それ以上に障害者にとって意義のある祭典なのではないでしょうか？その出来事を順を追って徒然なるままに書いてみます。

苦労したのが資金集め。前回韓国で行われたときは、航空券から宿泊費、はたまた滞在中のポケットマネーまで韓国のアビリンピック委員会が支援してくれたため、ほとんど自分たちの負担はありませんでした。しかし今回はすべて自費。スポンサーを探すため、あちこちに手紙を書くものの、反応はほとんどなし。その中で一つだけ反応があったのがトルコ航空。なんと一人分の航空券をタダにしてくれました。よっしゃー！

真夜中発のトルコ航空に乗り、イスタンブールへ。ポルドーへの乗り継ぎが24時間後なので、本当ならば航空会

社がホテルを用意してくれるはず。しかしルワンダ国籍所持者は、クレジットカードを持っていないとビザを発給してくれない（日本人は短期ならビザ不要）。そんなものを持ってこなかったルワンダ団一行、空港でビザが取れず…。つまり外に出られない…。よって24時間空港に軟禁状態。足も伸ばせず、硬いベンチで昼夜を過ごす羽目となった。最近どうも飛行機についていないようである。

しかし時間は過ぎるのでありますな。疲労困憊したものの、ポルドー到着。ロビーにはアビリンピック・フランスの人、そしてこれから1週間にわたって、私たちルワンダ団の面倒を見てくれるボランティアの女性ダナが待っていてくれました。彼女はチェコ国籍だけど、フランスに勉強に来ているらしい。一行はそのままホテルへ。しかしホテルの周りには何もありません。お店もレストランもない。しかもホテルのレストランは前もって注文を入れておかないと、食事を作らないそうだ。そんなこと知らなかった私は、注文など入れておらず、ダナと一緒にバスに乗ってスーパーへ。キガリを発ってからろくなものを食べていない



私たち。どっしり食べようと思っていたのに、手に入ったのはサンドイッチとリンゴ。しかもガテラはパンがあまり好きでない。前回のアビリンピックのときも初日はくたびれて食事に行く気力がなく、カップラーメンと食パンというメニューだったが、今回も初日はとほほ…の食事であった。

翌日は観光。アビリンピック・フランスのおもてなし。いくつかコースはあったが、歴史的なところに行って頭を使うよりも、日ごろのストレスから開放され自然を感じたいと、牡蠣を養殖している Arcachon 湾のクルーズに参加した。3月のフランスは寒かったけど海の風が気持ちよく、早速ここでボルドーの名物であるワインを楽しむのであった。



クルーズ船の上で果てしない海を見ながら、ガテラとガテラは何を思う？（実は湾なので、海は果てしないのだが…）

夜は新しくできたスタジアムでウェルカムカクテル。続々と各国からの選手団がやってくる。「こんにちは。どこから来たの？」それが共通した最初の挨拶。つい私たちはアフリカ勢を探してしまうのだが、どうやらまだこのアフリカ勢も到着していないようだ。どの国の選手たちもピンバッジを交換し合ったりして楽しそうだが、ルワンダ団、ピンバッジを作る予算がないため、それをうらやましそうに眺めるのみ。次回は作りたいな～。

翌日23日はダナに連れられボルドーの市内散策。バスと「トラム」と呼ばれる電車を乗り継いでボルドー市街へ。建物は古めかしく味があり、そして何といてもそこにいるフランス人がオシャレで街に溶け込んでいて、めちゃくちゃ素敵なのであった。寒い季節だからなのか、黒もしくは茶色という地味な服を着ているが、その姿はととても賢そうに見え、私もあんなオシャレをしてみたいと思わせる人ばかりだった。

夕方からはアビリンピック委員会の定例会に参加。新たにメンバーとなった国の紹介や、次の大会開催候補地などを話し合う。しかしアビリンピック大会は知名度が低いいため、予算を確保するのが難しいのでしょうか。なかなか候補地が見つからないようである。今回も本来なら2015年に開催されるはずだったが、候補地がころころ変わり、結局2016年開催となってしまったのであります。

夜はウェルカムディナー。大きなホールで正式なディナー。飲み物はワイン。しかしここがととても寒いのですよ。私たちのテーブルは入り口のすぐそばで、治安の関係から入り口は開けっ放し。正直寒くて料理もステージも楽しめなかった…。

24日、今日から実際にはスタートです。会場では今日から昼食・夕食も提供されます。しかしこの提供された食事が私たちはずっと不満だった。どうしても前回の韓国大

会と比べてしまうのです。今回は和食あり、韓国料理あり、洋食ありのビュッフェスタイル。飲み物もバラエティに富んでいた。だからみんなそれぞれ好きなものを好きなだけ取って食べることができました。しかし今回提供された食事は、メニューが種類しかなく、選択できるのは魚か肉かのみ。しかもパンだけ。バターもない…。うま米の国、日本から来た私は、お米が食べたくて仕方ない。そして魚も肉も食べたいという大飯喰らいの人もいましょうよ。でもどちらかを選ばなきゃいけないのです。

今回のアビリンピックでは、微妙に世界の力関係を感じることが多かったけど、この食事にはまさにそれを感じてしまった。あんたたち、フランスに来たんだからこれを食べなさいっていう、なんとなく押し付けがましいものを感じたのだ。飲み物もワインか水で、ビールだのジュースだのお茶だのという選択がない。だから特にアジアから来た人たちは、この選択の余地がない食事がきつかったであろうと想像する。

夜は開会式。世界中から集まった選手団が一堂に会するのだ。このアビリンピックが開催される直前、ベルギーでテロが起こった。だからまず1分間の黙祷。私たちがルワンダを出発する前日には、トルコでテロがあり、世の中安心して歩ける場所がなくなってしまっている。嘆かわしいことではないか。

今回は残念ながら参加者が少なかったように感じる。なんとアフリカ勢はルワンダのみ。配られた冊子にはウガンダ・ガーナ・ケニアなども参加することになっていたが、どうやらピザが発給されなかった、もしくは予算的に難しく参加を見合わせた模様。実は私たちもブルンジから義肢製作の見習いに来ている男性を通訳として参加させるつもりだったが、彼だけピザを発給してもらうことができなかった。だから本当は4人の参加だったのに、3人になってしまったのだ。残念である。



アビリンピック・ガールズに囲まれ記念撮影。どこの国の男性も、彼女たちと一緒に写真を撮りたくて順番待ちをしていた。全く男というものは…。

でも微妙に相変わらず、世界は肌の色によって共感を持ったりするようになってきていると思うのだが、アフリカ勢、ルワンダだけというのはちょっと寂しかった。アビリンピックは日本がスタートしたということもあって、圧倒的に多いのはアジア勢。驚いたのはアメリカの参加がなかったということだ。大国アメリカはこういうの興味ないんだろ？確か前回は出ていたと思うのだけど…。

さて開会式でガテラはボランティアのダナの持つルワンダ国旗に導かれるように壇上に上がる…と思ったが、彼って空気読めないのです。気持ちが舞い上がってしまったのか、導かれるはずが二人並んで歩いてしまい、なんともバランスの悪い入場なのである。あんたさー、他の選手た

ちの入場の様子、見てましたよね？国旗の後にみんなついてたでしょ？

お偉いさんの挨拶あり、パフォーマンスありの開会式でしたが、ヴィクトリアという義足を履いたとても美人の歌手が出てきて会場を盛り上げました。最近では障害者もどんどん前面に出てくるようになって、日本でも義足を履いた人たちのファッションショーや、私が日本に帰るといつも見ているNHKのバリバラという番組でも、障害者が本音をぶちまけていて、もっともっと健常者と障害者の壁が薄くなっていけばいいなと思うのであります。

さて実際の競技は2日間。ガテテが出場する義肢製作は4人ずつの二グループに分けられ、別々の日に行われる。

今回一番不満だったのは、この競技についてだった。「義肢ソケット製作」と名づけられたこの競技は、通常下肢切断者の断端部を入れるソケットというものを製作することとなっている。しかし今回は下肢切断者の使用する義足ではなく、膝につける「膝装具」と呼ばれるものの製作となった。おそらくこの競技に出ようと思って登録した選手たちのほとんどは、そんなことを予想しなかったに違いない。私たちがびっくりした。製作する側にとって、義足と装具は大きな違いがあるのである。

しかも競技で使われる材料は、フランスのメーカーで、下肢が不自由な人が装着する装具としては、かなり特殊な材料。フランス国外の人間がその材料を手に入れることも難しいのだ。

そして更に腹立たしいのは、主審となる審判がその材料メーカーから来ているという。なに？メーカーの宣伝のため、その材料を選んだのか？しかも競技を行うその場に、

メーカーのバナーをどーんと飾り付けするではないか！そしてその主審はそのメーカーでも技術者ではなく、主に販売に従事しており、事もあろうに技術的な知識に乏しいという。だったらどうやって出来上がった作品の優劣を決めることができるのだった！これらの点については、日本から来た審判もあきれていた。

まあしかし、いまさら変える事は不可能なので、そのまま競技はスタート。初日はフランス(2名)・オーストリア・韓国勢の試合。ガテテの出場する2日目はルワンダ・日本(2名)・インド勢である。2日目に出場する選手たちは、初日の試合を観戦できない。情報交換をしてしまうからだ。だから初日午前中は義肢製作競技以外の試合を観戦したり、会場で行われているデモンストレーションを見たりして時間を過ごした。競技者たちはそれぞれ不自由な体であるが、そんなことがどうでもよくなってしまふような仕事ぶりである。余程健常者と呼ばれている人間の方がいたら日々を過ごしているようにも見える。仲良くなった選手が競技に取り組んでいるのを見ていると、自分の身内のように感情移入してしまう。トリニダードトバゴから来た青年は知的障害を持っているが、アクセサリー製作の競技に出ている。ルワンダでもこの数年流行っている紙をくるくる丸めて作ったビーズを使ってネックレスを製作していた。同じようなものがアフリカとカリブ海で流行っている。これも悲しい奴隷貿易の結果であろうか？

午後は再びアピリンピックの企画したポルドー市街ツアー。一通り町をぐるりと回った後は、ワインの試飲。ここでやっと気がついたが、私はどうやらあまりワインが好きでない。赤ワインの高級で妙に渋いのは、一体どこがお



ルワンダ事務所代表ガテテより

【いつかくる死】

長いことワンラブの警備として働いていたシステムと呼ばれている爺さんが死んだ。

給料をもらおうと、次の日は必ず酔いが抜けていない酒臭い息をしながらやってくる。あるいは給料がなくなるまで、仕事に来ない。年のため走ることもできず、歯もない。警備としては全く役に立たない爺さんであったが、面倒を見てくれる家族もいないため、人助けの気持ちで彼を雇っていた。しかし彼はインテリでもある。家柄だって、爺さんの親父さんは、まだ王政があったころ王様候補にもなったくらいの、すばらしい家柄だ。

にもかかわらず、見る影もないシステムは、給料をもらって案の定仕事に来なくなったので、いつものことだと思っていたら、爺さんの姉がやってきて病気だという。そして数日後あっけなく死んでしまった。

爺さんの残り少ない家族は葬式を出す費用もない。だからワンラブで負担した。友人もほとんどおらず、家族もいない。爺さんの知り合いと呼ばれる人たちは、ワンラブの従業員がすべてだ。

とても質素な棺桶に入っているシステムに、それぞれが別れを告げ、あっという間に葬式は終わった。

大統領の母君が亡くなった葬式にも参列したが、方や1000人以上の参列者、そしてこちらはわずか20数人である。

真美はそんな葬式の様子を見て、自分の葬式のことを想像している。彼女はいつも「死」について語る。そんなに死ぬことを待っているのかというくらいに。

人の死は生まれたときから、神様に決められているのだ。だからそんなことをあれこれ今から考えても無駄なのだ。システムが誰からも見送られず、ひっそりと死んでいったのも神に決められた運命なのだ。

そう言っても、まだ真美は自分が死んだときのことを話している。ルワンダで死んだら、誰が自分のために泣いてくれるだろうとか、葬式に来てくれる人はいるのだろうかとか。そんなことを考えている間に、生きていううちに何をやらなくちゃいけないのか考えた方が、余程生産的であろうに。

この先、どちらが先に逝ってしまうのかわからないが、もっと今を大切にしようではないか。今自分が持っているものをあの世まで持っていくことはできないのだから、せめてそれをどうやったら後世に残せるか、そんなことを考えようぜ。

いいのか全くわからない。むしろ昔おばあちゃんが飲んでいた赤玉ポートワインの方がよっぽどうまい。

そしていよいよ決戦の日。ガテテはルワンダから持ってきたわずかな工具類を手ぬぐいに巻いて会場に持っていく。しかし他の選手はしっかり工具箱に入ったたくさんの工具を持参し、準備万端である。

ここでまた気がついたのだが、サンプルとなる足のモデルは統一されておらず、右足もあるし左足もある。これまたあり得ない試合である。しかし主審の彼女は「何が問題なのだ？」と強気な姿勢を崩さない。

メリハリもなく、気がついたら競技がスタート。

さすが日本選手は一度も使ったことのない材料が相手でも、てきぱきと作業を進めている。それに比べガテテは…。隣の人のやり方をカンニングしながら、何度もサンプルとなっている装具を見に行っている。それも仕方ない。ルワンダでは今回のような装具を作ったことはほとんどないのだから。

ああ、しかし仕上げの段取りになって、ガテテは決定的なミスをしてしまう。サンプルとして置いてある装具は右足のもの。しかしガテテには左足のモデルが渡されている。だから本当なら左足に合わせて切り取らなくてはいけないプラスチックを、ガテテはサンプル通り右足に合わせた形で切ってしまったのだ。本人は全く気がついていない。でもそれを横から口出すこともできない…。



いつになく真剣な表情で試合に挑むガテテ。使ったことのない道具や材料に苦労しながら、何とか作り上げたものの…。

そんなわけで一生懸命試合に挑んだガテテであったが、今回も賞を取る事はできなかった。金メダルは日本、銀はフランス、銅は韓国という結果であった。

残念ながらワンラブの義肢装具士たちは、こういう細かい注意ができない。なぜそうなっているのかという理論に弱い。これは大きな反省点である。

二日間の競技が終わり、そのまま閉会式に突入。だからどの競技も審判がじっくりと採点する余裕もなく、めちゃくちゃ大変だったらしい。せめて閉会式は次の日にしてほしいかった。

パラリンピックに行ったときも感じたが、こういう大会というのはどうしても先進国に有利になるようにできている。パラリンピックの場合は、決定的に義足や車いすの質の違いがあるため、途上国は勝てない。アビリンピックは、材料・道具・設備が十分でないから、技術を向上させてくてもかなわず、勝つことが難しいのだ。これは負け惜しみか？とも思うけど、あながち外れているとも思わない。

もっとも私たちにとって問題なのは勝つことではない。大会に参加して思うことは、ルワンダの外に出ることによ

って彼らの見聞が広がっていけば、それだけで良いではないかということだ。いろんな文化や歴史を持った人たちが一箇所に集まり、いろんな障害を乗り越えながら釈迦力になったり、冗談を言って笑い合えば、十分かなど。大切なのは、月並みかもしれないけど、そんないろんな国の人との出会いです。

フランスだからフランス語を話せないと大変だろうかとか心配していたが、英語を解するボランティアのおかげで不自由なく過ごすことができた。ダナは自分のボーイフレンドも紹介してくれて、目の前でチュッチュとキスをするのがちょっと目のやり場に困ったが、彼女のおかげで楽しい滞在になったのは間違いない。もう一人キャロリンというおばさんボランティアも、ホテルの近くにレストランがないのを心配し、お腹をすかせているのではないかと手作りのキッシュを持ってきてくれた。



ダナ、一週間どうもありがとう。あなたのおかげで何事もなく無事に滞在を終えることができました。また会う日まで。

それから2011年韓国アビリンピックで出会った人との再会。韓国でもらったカバンを持っていたら「4年前にも出場したの？僕もそれ持ってる。」と声をかけてくれた車いすに乗ったアジアの男性。

大会が始まる前、インターネットでしかやり取りをしていなかったアビリンピック・フランスのスタッフの顔を知ることができたり。インターネットは便利だけど、顔を合わせて話した方が、ずっと親しみがわくというもの。そんなことを思い出していると、アフリカの「山と山は出会わないが、人と人は会う」ということわざが頭に浮かぶ。

競技の方法が公平でなかったり、微妙に西洋と東洋、あるいは先進国と途上国の政治的な力関係を見せつけられたり、食事がいまひとつだったり、不満も残った今回のアビリンピックだったけれど、概ね無事に終了し、一つのことをやり遂げた達成感を持ってルワンダに戻ってこることができました。次回は多分2020年。開催国は決まっていないけど、既にルワンダでは連れて行きたいと思っている障害者をリクルート中。

よっしゃー、4年後に向けて、またやるぞー！



試合を終えて、記念撮影。ルワンダ・日本の選手2人・インドの選手。お疲れさまでした。



今号の患者さん

その日、私は日本から義肢製作所を見に来た男性を案内していた。

一通り話も終わり、ふと横を見るとアシエルが誰かと話している。そしてその男性は私に近づいてくる。

ん？両手がない？見覚えのある障害だぞ。あれ、もしかして…。

そう、彼は今から18年前に義手を作ったパトリック。あの時「自称」10歳だったパトリック、いや〜、彼もまたおっさんくさくなっていた。

しばらく前、ワンラブ通信にも彼のことを書いたから、それを読んだ人は記憶にあるかもしれない。

彼は実の父親に両手を切り落とされてしまったのだ。なぜ？彼の物語はこうだ。

彼の父親は泥棒をすることによって、生計を立てていた。だから盗むことが仕事だった。

幼かった彼は盗みがいかに悪いことかという判断もまだついていなかった。だからつい友だちに話してしまった。父親がヤギを盗んだことを。

そのことを知った父親は激怒し、あろう事か息子の両手をなたで切り落としてしまったのだ。

そんなひどいことをした父親は、当然捕まり、罪を償うための罰を受けた。しかしパトリックの受けた体と心の傷の深さは想像するに余りある。

そして両腕をなくしたパトリックは、イギリスのジャーナリストにより義手の材料を提供され、ワンラブで義手を作ったというのがいきさつである。

その後しばらくして彼の姿を見たが、既に成長し、作った義足は合わなくなり、義手なしで生活をしていた。

更に年月が経ち、ある日突然テレビに彼が出ていた。どう理由でかはわからなかったが、サッカーもやり、絵も描き、勉強もがんばっているという内容だった。



今も他で作った義手を持っているそうだが、義手なしの方が生活が楽なので、あまり使っていないそうだ。

そして更に時間が過ぎ、今日再び会ったのである。

今は大学に通い、勉強をしているという。英語も上手にしゃべり、ああ、あのときの子供がねえ、こんなに大きくなってという感情が出てきて、非常に感慨深い。

で、今勝手に考えていること2つ。…というか、既に本人には話したのだが、まずパソコン教室に通いませんか？ということ。この話にはすぐに喰いついて来て、7月に始まる初級コースに通う予定となっている。

もう1つは4年後のアビリンピックに出ませんか？ということだ。少なくとも話をした限り、彼は相変わらずサッカーも絵描きも続けているという。今回のアビリンピックでも口で絵筆をくわえて、絵を描いている競技者がいた。だったらパトリックはもっとうまいかもしれない。うーん、いいではないか。もしかしたらもっと他の才能も持っているかもしれない。パトリック本人、この話にも乗り気である。うま〜く煽って、アビリンピックまで彼のやる気を継続させたいものだ。

再びよっしゃー！楽しみがまた増えた。皆さま、4年後、彼がアビリンピックに参加するかしないか、乞うご期待！

【世界の勝手な7不思議のうちいくつか】

外国の人が奇妙に思う日本人の習慣の一つに「マスク」がある。特に寒い季節は右を向いても左を向いても、みんなマスクをかけている。私だけが感じていたことかと思ったら、先に書いたアビリンピックボランティアのダナも、突然何の脈絡もなくそのことを指摘してきた。日本を離れてみるとわかるが、海外でマスクをしている人と言うのは「病気の人」というイメージがあり、あまり好感をもたれない。あるいは日本はそんなに空気が汚いのかと思うらしい。私も日本に到着し、電車に乗るとあまりのマスク人口の多さにびっくりするのであります。あれって、そんなに必要なものなのかしら？それとも日本人って、そんなに抵抗力が弱いのか…。

それから便座。アフリカを旅したことのある人はピンと来るかもしれないが、こちらの水洗トイレはなぜか便座のないことが多い。壊れて取れてしまったのか、はたまた最初から取り付けていないのか、とにかくついていない。だから用を足すときに工夫をする。あくまでもプライベートな空間なので、敵がどんな姿をして用を足しているのかわからない。でも便座のないトイレにべたっと座って用を足すのは、結構勇気がいるから、工夫をしているに違いないのだ。ちなみにアビリンピックの会場のトイレにもなぜか便座がついていなかった。だからアフリカだけのことではないのかもしれない。

トイレの不思議ついでにもう一つ。日本のトイレについている「音姫」というふざけた名前の小ざかしい代物。ダナに日本のトイレには用を足すときに音を出すための設備がついていると言ったら、目をパチクリさせていた。

私も未だにあれにはなじめない。というか、あの小ざかしさが嫌いなのである。だって生きてる限り、誰でも用を足すのですよ。そのときには当然音も出しましょう。人によって、その音はさまざまかもしれないけれど、そんなに激しく恥ずかしいってものでもないと思う。しかもそこはトイレですよ。そこで誰かが食事をしているわけでもない。みんな一つの目的のために、そこに集まっているのです。

果たして世界のどこのほかの国に、あの「音姫」と呼ばれる機械が設置されているのであろう。本当に日本独特の文化なのか、非常に気になるところである。



雑文もろもろ

前号でお知らせしましたが、年末から2月にかけて、資金を集めるためのクラウドファンディングに挑戦していました。自分でもびっくりする勢いで、本当にたくさんの方がご協力をしてくださり、合計536万7千円も集まりました。ここからクラウドファンディングの会社の仲介料が引かれてしまうものの、それでもたくさんの資金が集まりました。ご協力くださった皆様、ありがとうございました。

アピリンピックの準備やらで、なかなかその資金を使っでの巡回診療の計画を立てることができませんでしたが、無事フランスからも戻ることができ、現在準備に取り掛かっているところです（この通信が発送されるころは、既に巡回診療を始めているかもしれません）。

前号にも書いたように、ブルンジの状況はあれからあまり変わっていません。恐ろしいのは、その状況に慣れてしまったのか、最近では話題に上ることも減ってしまいました。しかし相変わらず人は拉致されたり、殺されたり、また家宅捜査をする警察による略奪というのも横行しているようです。

そんなわけで、私たちのブルンジの義肢製作所は全く機能していない状態となってしまっています。このまま時期を待つか、それとも撤退するか。判断を迫られる時期に来ています。

今回久しぶりにヨーロッパに行けるということで、目がそちらに向きました。どうにも先進国は肌に合わないと思いつつも、その国を訪れるのに情報を何も持っていないのは失礼であろうと、少しでも勉強もしました（と言っても、難しい歴史とか地理ではなく、どこに美味しいものがあるかどうかとか、そういう俗っぽい勉強の方が多かったけれど）。

自分が行くとなると、その国のニュースが気になります。でも入ってくるのは悪いニュースの方が多いです。直前にトルコ・ベルギーでテロとか、トルコで日本人がイスラム国に入ろうとして捕まったとか。

フランスの空港には、アーミー服を着て銃を持った兵隊が警備していました。ルワンダではそういう姿の人を見ることは、そう珍しくはありませんが、先進国の空港に当たり前のよう銃を持った人がいると、ちょっとびっくりします。

この世界には安心して歩ける場所がなくなってしまったのだろうか？と悲しくなります。

目には目を、歯には歯を。仕返しをしたい、そういう気持ちを私も当然持つことはあります。でもその負の連鎖はどこかで誰かが断ち切らない限り、未来永劫続いてしまいます。

今年もまた4月がやってきました。ルワンダの大虐殺が始まった月です。22年が経ちました。今のところは確実にその数字を伸ばしていています。でも人間のことから、いつまたあの虐殺が繰り返されてしまうか、誰も予想がつかえません。でもそうならないよう、こらえて、がんばっているルワンダの人がたくさんいます。

日本もこれから先「戦後〇〇年」の〇〇に入る数字を伸ばしていこうではありませんか。結婚をした二人が、紙婚式からどんどんグレードアップして金婚式に至るのを望むように、平和だって同じように祝おうではありませんか。ワンラブを支援してくれている人たちは、きっと同じように思ってくれていると信じています。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信56号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（12月～3月）

12月	円
1月	円
2月	円
3月	円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足	14本
装具	5本
杖	32本
車いす	2人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？

お正月にたくさん買ってしまった年賀状や書き損じはがきなど、ワンラブ通信を送送する際の切手などに換えて利用したいと思っておりますので、ぜひお譲りください。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信57号 2016年4月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

